

スポーツ楽しくやっています

今年はいよいよ東京でのオリンピックが開催され、スポーツへの関心が高まります。「スポーツは観戦専門」という仲間もいますが、スポーツを楽しくかつ本格的にやっている仲間もいます。三鷹武蔵野支部の田中精一さんの長男、海翔くん、世田谷支部の川田芳久さんを紹介しましょう。

動きのス。ヒードが複雑

少林寺流空手の田中海翔くん



2018年12月の少林寺空手の選手権大会で

「はじめは剣道をやらせようと思ってたんです」と話すのは、高校生まで剣道をやり2段の腕前という田中精一さん(三鷹武蔵野・電気工事)。「あとで一緒にやり、教えることもできるし」と、4年前に長男の海翔くんを道場に連れて行った時のことを振り返ります。

道場をのぞいたら、こっちの方がいいとなり、少林寺空手五行館道場に通い出したのが小学1年の終わり頃。一昨年12月の大会では、南光(アーナク)・4年生の部で優勝するほどに上達しました。

「剣道ではなくても…」

「南光」とは数ある型の一つで、大会後1年足らずで「汪(ワンシュウ)」「半月(セ



左から海翔君、精一さん、妹の亜依(あい)ちゃん

速いのがどんだん混じり合って複雑になり、覚えづらくなっていくそうです。最近では自分一人で週1回



マイボールを持って構える川田さん

一念発起し 11時過ぎまで

12月2日、東横線の綱島駅から徒歩10分程の所にあるフンドワンのボウリング場は月曜日の午前中にもかかわらず、高齢者、家族連れで7割以上のレーンでピンが弾ける音が轟き、歓声が響いています。

「このボウリング場の会員になっていて定額で投げ放題なので、1日に12〜13ゲームは投げます」と話すのは世田谷支部の川田芳久さん。川田さんがボウリングを本格的に

始めたのは11年前、50歳の時です。仕事をしていて工務店主催のボウリング大会で最下位に近い惨憺(さんたん)たる成績に終わり、参加者から「侮辱」されました。「よくしてやる」と負けず嫌いな性格に火が付き、それからボウリング場通いが始まりま

す。昼間は仕事、夜はボウリング、11時過ぎまで投げる日々。2年後にはボウリング場のスタッフと行なう大会で2回優勝、パーフェクトも出しました。工務店の大会では敵なし、あまりにもハンディキ

ストライクの爽快感 ボウリングの川田芳久さん

「実は、昨日釣りに行ったのですが、釣ったメジナのエラで指を切ってしまったんです。ケガの影響でなかなか調子が出ない川田さんでしたが、やはり10年来、1週間に3日以上ペースでやっているだけのことあって、次第にスコアのデイス



1日12〜13ゲームは投げます

「痛みで投げられなくなるとは、ずーっと続けたいですね」。川田さんは右手首には特別なプロテクターが巻かれていますが、左官で始めて、防水、塗装など様々な仕事とボウリングの「やりすぎ」で医者から「手術」と言われています。

「本人がやるって言いだして全部続いているので、親はどれかに絞ったらと思うんですけど」と苦笑いする精一さん。4月には6年生になるので、そろそろ選択の時期が近づいているとの認識です。

最後に将来の夢を海翔くんに聞くと、「八村選手のようにアメリカへ行ってプロ選手になる」との回答。お母さんの綾子さんが「空手から始めたバスケになりましたね」と言い、家中笑いに包まれた明るい田中さん一家でした。

「本人がやるって言いだして全部続いているので、親はどれかに絞ったらと思うんですけど」と苦笑いする精一さん。4月には6年生になるので、そろそろ選択の時期が近づいているとの認識です。

最後に将来の夢を海翔くんに聞くと、「八村選手のようにアメリカへ行ってプロ選手になる」との回答。お母さんの綾子さんが「空手から始めたバスケになりましたね」と言い、家中笑いに包まれた明るい田中さん一家でした。

卓球通して仲間が 相手思いやり勝負は別

試合中も声をかけ励まし、声援を送ってくれました。万国のアスリートたちが参加するオリンピックは、



と説明をしてもらったことを今も鮮明に憶えています。7月開催になったのは、まだに分かりません。日本の7月が暑いのは誰でも知っています。2020東京五輪を大成功させなければなりません。7カ月しかないが、関係者の方々は忙しいとは思いますが、頑張ってもらいたいです。(足立)

56年前の五輪 思い出多く

看板 細谷孝一

オリンピックと言えば、思い出すことが多いです。56年前の東京五輪の年に、看板屋の見習いとして9月30日に入社しました。会社の社長とその家族とともにトヨタのパブリカという車で代々木オリンピック会場の外から聖火台が見える所で、社長から「オリンピックが始まるんだよ」

卓球が好きで、私的交流のため中国、北京での試合まで参加しました。公務員で作るチームは非常に友好的で、卓球を通して、多くの仲間を作り、初めて試合で相手にする選手とも、試合が終われば勝負は別にして、握手を肩を組みながら労う、このようなことがどの競技においても行なわれることを楽しみに、競技場へは行けませんが、前回の東京大会の時のように、テレビの前で、ハラハラドキドキしながらの観戦になると思います。(渋谷)